

浜崎伝統的建造物群保存地区

浜崎地区は、江戸時代（1603–1867）初期の萩城下町の主要港であった。松本川が日本海に合流する三角州の北東端に位置している。萩は長州藩の都であり、毛利家の支配下で町が発展し、浜崎も発展した。商業の中心地である大阪から下関海峡を経て、日本海沿岸を北海道まで往復する北前船の重要な寄港地であった。商人たちは、酒や塩、その他の商品を積んで浜崎に停泊していた。萩の富は、商船との交易と、この地域の豊富な漁業から得られたものであった。

明治時代（1868–1912）には、魚介類の加工品産業が浜崎地区で急成長し、港周辺エリアは萩の商業の中心地となった。特に浜崎地区は、今でもアジ、カジキイカ、アカアマダイなどが有名である。しかし、20 世紀半ばには、浜崎の経済力は大きく低下した。第二次世界大戦が終わり、日本が降伏した後、萩の産業は行き詰まり、空襲は免れたものの、様々な産業は衰退していった。日本の復興が始まるにつれ、人々は大都市への就職を求めて萩を離れていった。20 世紀の終わり頃になると、浜崎の建築物が重要文化財として歴史的意義を認められるようになった。1998 年に港の歴史調査が本格化し、2001 年には「重要伝統的建造物群保存地区」に指定された。

現在、100 以上の建物が歴史地区の一部として保存されている。これらのうち 44 棟は 1868 年以前に建てられたものである。ほとんどの建物は優れた修復状態で残っており、かなりの数の建物が現代でも利用されている。戦争や自然災害、近代的な開発の影響を免れた浜崎地区は、萩でも他に類を見ない重要な場所であり、日本の建築史の窓口となっている。

浜崎の歴史的建造物の多くは、この地域の大通りである本町筋に沿って並んでいる。町の中心は浜崎代官所で、1730 年代に描かれた萩城下町図によると、この代官所は珍しく海に面していた。これは、代官が管轄する「七つの島と七つの湾」を調査するためであったと考えられる。同図には、本町筋に立ち並び、海に面した巨大な蔵屋敷が描かれている。本町筋の周辺エリアは海拔の高い尾根に位置していることから、「吹上」とも呼ばれている。今日の浜崎のほとんどは、19 世紀の変わり目に行われた埋め立て工事でできたものである。旧藩船小屋は、日本の瓦屋根かつ石造りの船小屋の唯一の現存例で、かつては水辺にあったが、土地の埋め立てによってこのエリアが陸地になり、現在は住宅の向かい側にある。

浜崎の歴史的建造物の多くは、今でも人が住んでいる、もしくは比較的最近まで人が住んでいたものである。山村家、山中家、藤井家、須光家、斉藤家、田中家の住宅がそれらにあたる。梅屋七兵衛宅は、幕末期に 1000 丁の鉄砲を命懸けで上海から長州藩に運んだ色彩豊かな明治時代の男の家であった。七兵衛は京都の小堀遠州流で茶道を学んだ審美家でもあった。旧山村邸では観光情報を提供している。

Google マップリンクは[こちら](#)

旧山村家住宅

住所：山口県萩市浜崎 77

電話番号：0838-22-0133

営業時間：午前 9 時から午後 5 時

入場料：無料

アクセス：「大船倉入口」バス停から徒歩 3 分（萩循環まあるバス東回り）